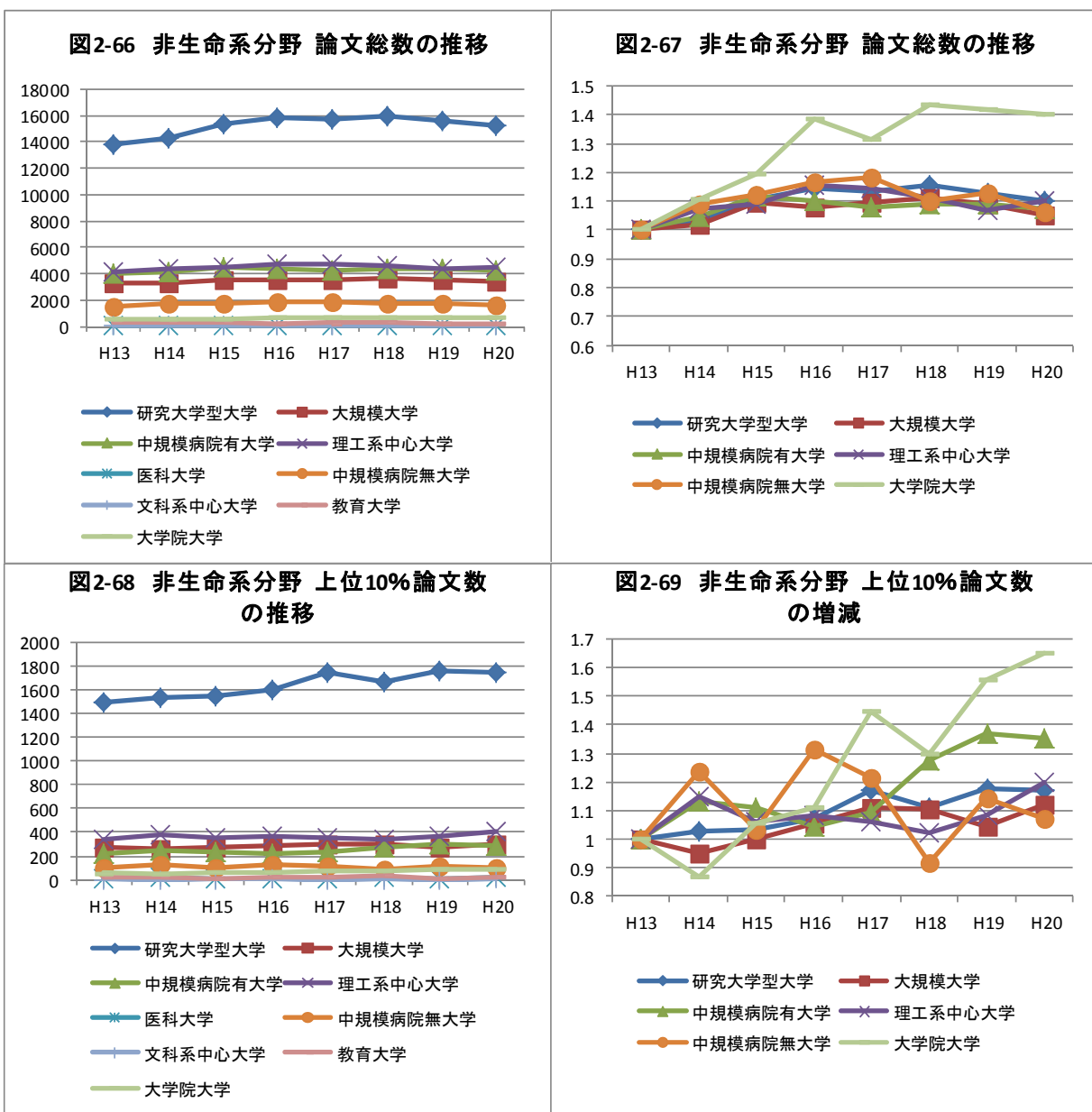


以上の変化の背景について、更に分野別に分解して検証してみる。全体を大きく生命系以外の分野全体（非生命系分野：化学、材料科学、物理・宇宙科学、計算機・数学、工学、環境・地球科学）と臨床医学、それに基礎生命科学の3つに分類して分析する。

まず非生命系分野であるが、論文総数の伸びに関する大学類型間の差は小さい。Top10%論文でも、絶対的な本数が少ないので留保が必要であるが、中規模病院有大学が健闘しているように見える。一方2004年前後を境に、それまで全体的に増加傾向にあった論文総数については概ね低下傾向に転じている（●頁の図■にも同様な傾向が見られる）。同年は国立大学が法人化された年であるが、このことと論文数の減少と関係があるのかどうかは分からない（次に見る臨床医学分野ではこうした事態は生じていない。）。



(出典) Thomson Reuters 社刊行"National Citation Report for Japan 2001-2010“(NCR-J)に関する根岸正光名誉教授(国立情報学研究所、総合研究大学院大学)の調査統計結果に基づき内閣府作成。